

⑥Int.Cl.<sup>2</sup>  
E 04 F 13 / 08  
E 04 F 13 / 16  
E 04 F 13 / 14

⑦日本分類  
86(6)B 32  
86(6)B 324  
86(6)B 323

⑧日本国特許庁

⑨実用新案出願公告

昭51-23229

## 実用新案公報

庁内整理番号 5834-22

④公告 昭和51年(1976)6月15日

(全3頁)

1

2

### ⑤ 鑑 板

④実 願 昭46-109857  
②出 願 昭4.6(1971)11月24日  
公 開 昭48-65023  
③昭48(1973)8月17日  
⑦考 案 者 奥義博  
名古屋市瑞穂区下山町1の94の1  
④出 願 人 中村合板株式会社  
名古屋市港区木場町6

### ⑥実用新案登録請求の範囲

鑑板の上端面を表面に対し鋭角をなす斜面に形成し、板の裏面下部の下側鑑板の上端部に重合する部分の上端位置に下側鑑板を嵌合する鋭角の凹状空間を形成する斜面を有するブロックを板の上端斜面とブロックの該斜面とを平行に釘或いは接着剤にて固着した鑑板。

### 考案の詳細な説明

本考案は家屋の外壁、腰張り等に用いられる下見用の鑑板に関するものである。

従来の下見用の鑑板を張設する場合の施工法は鑑板の下端部の羽重ね部分を下側の鑑板の上端部の羽重ね部分の外表面側に重合して釘打ちし、順次板を斜め外側下方に傾斜させて張合せ、外壁を形成する施工法であるが、該施工法による場合には、まず鑑板を所定の取付位置に支持して上端部を柱又は胴縁に釘打ちして固定しなければならず通常使用される長尺サイズの鑑板を用いる場合、鑑板を所定位置に支持して釘打ち固定する作業は一人でやうには困難な作業であり特に、取付け位置が高くなると施工には熟練を要し、手間もかかるものである。しかも、従来の施工法による仕上がり壁面は鑑板の羽重ね部分に打込んだ釘の頭が表面上に露出し、外観上極めて見苦しくなるばかりでなく、風雨に晒られることによつて露出した釘の頭が腐蝕したり、雨水が釘に沿つて鑑板

の内部にまで浸透して釘打ち部分の板を腐蝕したりすることによつて釘打部の保持力がなくなるため、鑑板に反りやガタ付きを生じて補修或いは張り換えをせねばならない欠点があつた。一方上記欠点を解消するために鑑板の上端面を表面に対して鋭角をなす斜面に形成し、鑑板の裏面下端部には張設した際に重合する下側の鑑板の傾斜した上端面に平行な長溝を凹設し、該長溝に支持片を嵌合させることによつて、鑑板の上端部を固着する釘の頭を隠蔽し又鑑板の下端部を固着する釘を省略することにより釘頭の露出をなくして外壁の外観を向上させる鑑板が考えられてはいるが、近年一般に下見用鑑板の基材として使用されているものは薄物板或いは無機質不燃板等のように強度的に脆弱なものが多く、上述の鑑板のように溝を設けることが困難なものであり、溝が形成出来ても該溝に支持片を取付ける場合、基材と支持片との保持強度が極めて低く、該鑑板を壁面に張設した場合、下側から風圧等の力を受けると、支持片に大きな負荷がかかり、最重要部である支持片取り付け部分が破損してしまつて壁面としての機能が全く失われてしまう致命的な欠点を有するものである。

本考案は、上記欠点を除去し、如何なる基材であつてもブロックを簡単に強固に固着できると共に、張設施工を容易にし更に鑑板相互の嵌合作用により釘頭の露出をなくして壁面の外観を向上させると共に釘の腐蝕或いは板面の腐蝕によつて生じる保持力の低下によるガタ付きを防止すると同時に鑑板の反りを規制して張設壁面の耐久性を向上することを目的とするものである。

以下、本考案の詳細を図によつて説明すると1は長方形の鑑板で上端面2は鑑板の表面に対して鋭角3をなす斜面に形成し鑑板の裏面4には、重合する下側の鑑板の上端面斜面に嵌合する斜面5を有するブロック6を釘7或いは接着剤により固着してある。ブロック6は鑑板の長手方向に沿つて任意の個数を固着し、下端部は、斜後下方に突

3

出した形状となつている。ブロック6の厚さは、重合する下側の鍍板の先端部との嵌合によつて鍍板を保持し、かつ、鍍板の反りを防止できる厚さであり鍍板の材質によつて任意な厚みを決定することができる。本考案に係る鍍板を張設施工する場合柱8間に取付けた横胴縁9'に上端部を釘10'により固定し、表面を外側に向けて斜外側下方に傾斜して取付けた下側鍍板1'の上端斜面上2'に鍍板1の裏面3に固着したブロック6を載架し、下端部を下側鍍板1'を固定した釘10'を覆つて重合し、ブロック6の下端面5と鍍板1により形成した鋭角の凹状空間に下側鍍板1'の鋭角上端部を嵌合して下側鍍板1'と平行に傾斜した鍍板1の上端部を横胴縁9に釘10により取付ける。

同様な施工により鍍板を順次上方に張設して鍍板状の外壁面を形成する。

上述の如く本考案による下見用鍍板を鋭角に形成した先端部を有し、鍍板の裏面には張設する場合に重合する下側の鍍板鋭角先端部に嵌合する斜面を有するブロックを固着してなる鍍板であり、本鍍板を製造する場合、突設するブロックを釘或いは接着剤により固着するだけでよいため、基材が薄物板或いは無機質不燃板等のように脆弱なものであつても容易にブロックを突設することができるため、必要な場合には接着剤と釘を併用すれば十分なる保持強度を得ることができるため、従来の溝を基材に設けて支持片を突設する鍍板の場合に基材が薄物板或いは無機質不燃板等のように脆弱なものにおいて溝を設けることが困難なものでありさらに溝が形成できても支持片と基材の十分なる保持強度を得ることができないために、鍍板の下側から風圧等の強い力が加わつた時に生じる支持片取付部分における破損という致命的な欠点を全く解消するばかりではなく、ブロック取付け位置及びブロック形状が一定であるため大量に容易に

4

生産することができる。

又本考案による鍍板の施工方法は、鍍板の裏面下部にブロックを固着してあるため、鍍板を張設する場合固定した下側の鍍板の上端面にブロックを載架して、鍍板を所要の取付位置に支持でき最初に所要位置に支えながら釘打ちをする熟練した作業を必要としないため、一人で簡単に張設施工ができるばかりではなく、固着するブロックの下端面と鍍板とで形成する鋭角な凹部空間に下側の鍍板の鋭角上端部を緊密に嵌合するため、鍍板の下端部を釘打ちして下側鍍板の上端部に固定する必要はなく、しかも嵌合構造とすることにより上、下鍍板が相互に反りの発生を防止する効果を奏するものである。更に鍍板の下端部によつて下側鍍板の上端部を胴縁等に固定する釘の頭を隠蔽でき、又鍍板を固定する釘の総使用本数を大幅に減少させることができるために、釘の腐蝕により生じる鍍板の保持力低下を防止することができると同時に固着用の釘の頭が外部には全く露出することなく壁面を仕上げることができるから、壁面の美観を極めて優れたものにすることができる。

#### 図面の簡単な説明

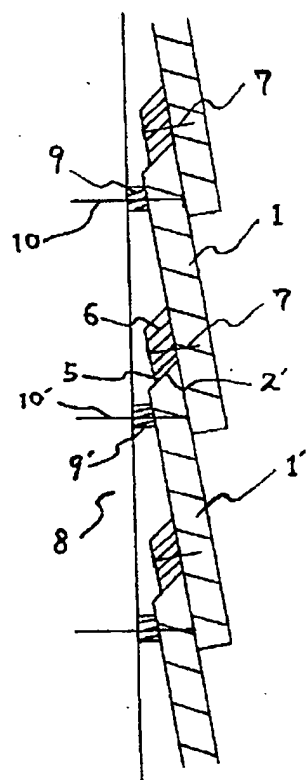
第1図は本願実施例においてブロックを釘にて突設した鍍板の裏側を示す斜視図。第2図は、本願実施例の取付状態を示す外壁の縦断面図。第3図は、本願実施例においてブロックを接着剤にて突設した鍍板の裏側を示す斜視図。

図示符号において1, 1' : 鍍板、2, 2' : 鍍板上端部、4 : 鍍板裏面、6 : ブロック、7 : 釘、8 : 柱、9, 9' : 横胴縁、10, 10' : 釘。

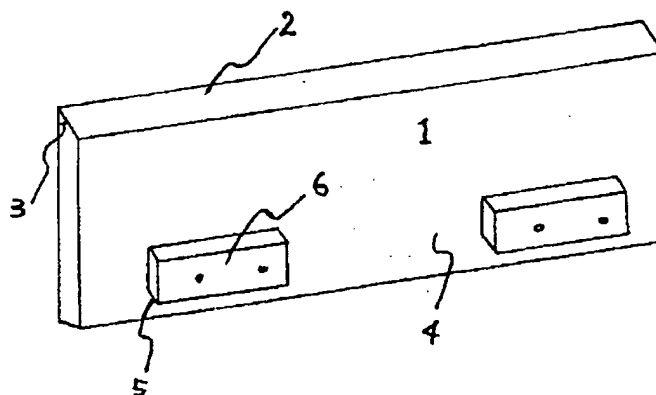
#### ◎引用文献

実 公 昭49-46761

才 2 図



才 1 図



才 3 図

